

ヴィゴツキーの「感情」「表象」「概念」の発達論 —知的障害児発達論の前提として—

加藤 映美*・芦沢 直太*・滝口 雄太*・広瀬 信雄**

I. はじめに

ヴィゴツキー（1896—1934）が、心理学、障害児教育・心理学の研究を行ったのは晩年（といっても、27歳から37歳）の約十年間に集中している。早すぎた死が、彼の多くの研究を「未完」とであるという印象を強めているとも言われるが、旧年の心理学から新しい心理学に、古い欠陥学から新しい障害児教育・心理学に変革することをヴィゴツキーは自覚していたのか、病身でありながら、多くの発表を「大いそぎ」で行ったように思える。残念ながら研究発表の当時、そして死後何年もの間、彼の研究は無視、処分され、当局から、彼の名前は封印された。それは学問的な理由からではなく、政治的な理由、すなわち権力者側の都合によるものであった。今日、何度目かのヴィゴツキー・ルネッサンスを迎えているが、「西側」諸国でヴィゴツキーが読まれるようになり、彼の存在が知られるようになるのは1962年に英語訳、そして日本語訳の『思考と言語』が刊行されて以降のことである。

小論では、『思考と言語』（原著は、死の直前に書き上げられた最後の著書であるが、病床での口述筆記の部分もある。）に述べられている、子どもの感情、表象、概念の発達に焦点を合わせて、その本質とヴィゴツキーが明らかにした発達の過程を扱う。それは、筆者らの主要なテーマである知的障害のある子どもたちの「感情」「表象」「概念」の発達を考える上での拠りどころと考えている。

II. ヴィゴツキーと感情研究

本章では、ヴィゴツキーに関する二冊の書籍『ヴィゴツキー理論の真髄 なぜ文化—歴史的理論なのか』『子どもの心はつくられる』を中心に、ヴィゴツキーと同世代の心理学者による感情研究を整理する。

* 山梨大学大学院教育学研究科修士課程教育支援科学専攻

** 山梨大学大学院総合研究部教育人間科学域

1. ヴィゴツキーの感情研究

まずは中村（2014）の『ヴィゴツキー理論の真髄 なぜ文化—歴史的理論なのか』の部分 요약する。

ヴィゴツキーは1930—1931年にかけて『高次心理機能の発達史』を執筆した。その中で、ヴィゴツキーが自らの理論が主知主義¹的傾きから免れていないことに気づいていた。また、同時代の心理学において、感情に関する研究がとりわけ大きく立ち遅れていたという事情があった。知性と感情との結合や関係を捉えようとしたときに、心理学での両者の研究の発展水準に抜き差しならぬ違いがあったのである。そのため、ヴィゴツキーが感情の心理学理論の基礎を築くという課題を引き受けざるを得なかった。

ヴィゴツキーは「単位²の思想」と呼ばれる知性と感情のシステム論を使用し、主知主義を克服して、感情の過程を含めて人間の文化的発達を理解しようとした。ここでヴィゴツキーは次のことを主張していた。人間の意識活動を把握し、理解するためには、その過程を知性という要素や感情という要素に分解するのではなく、知性と感情の統一たる「意味のシステム」を分析単位としなければならない。知性や思考といったものを感情と切り離すことにより、人間の行動を導く、欲求や興味、意向や傾向との関連性を説明することができなくなってしまう。また、ヴィゴツキーは子どもの文化的発達全体を総合的に把握するために、心理過程の動機的、感情的側面の理解を深め、人間の感情の文化的発達を解明する必要性に言及していた。

2. ヴィゴツキーが影響を受けた感情研究

菅田・広瀬（2002）の『子どもの心はつくられる』所収の情動についての章に書かれている、ヴィゴツキーの周囲の心理学者についての記述を以下に 요약する。

ダーウィン（1809—1882）は、人間の情動と、動物界に見られ、それに相応する感情的・本能的な反応との一般的な関係を明らかにした。情動は動物に起源がある。

リボー（1839—1916）は人間の情動の生物学的な起源という考え方を、動物の感情的・基本的な反応から展開しようとした。そして、この見方によっていくつかの心理学説が到達した唯一の結論は、人間の感情反応は、動物であった時の痕跡であり、外部表出や内部推移において極度に弱まった痕跡とされた（例：恐怖は逃走の抑制、怒りはつかみ合いの抑制）。よって、情動の発達曲線は下降していくように受け止められた。

ジェームス（1842—1910）とランゲ（1858—1921）は情動の活力の源泉を、情動過程を伴う肉体反応に求めた。ジェームスとランゲ以前の心理学者は、情動過程の推移を次のように考えている。まず、情動を引き起こす外的あるいは内的な出来事（例：危険との遭遇）の近くで、それに続く情動そのものの心的体験、さらにそれに呼応して起こる肉体的、生物学的な表出（例：震え、喉の渇き等の恐怖に伴う徴候）といった順序である。対して、ジェームスとランゲはこの過程を別の順序で考えるように提案し、様々な出来事を知覚した直後に反射的に起こる肉体的な変化の発生を指摘した。つまり、恐怖やその他の情動の際

に反射的に生じるこれらの変化が知覚され、自分の肉体的反応（血圧の上昇や心拍の増加等）を知覚することが情動の基礎となるとした。また、ジェームスの見方は、情動の外部表出を十分に抑えこむと情動は消失し、その逆に、一定の情動の表出を十分に呼び起こすとその表出に引き続いて情動が生じる（泣くから悲しくなり、震えるから恐ろしくなり、殴るから腹が立つ）とされていた。

3. ヴィゴツキーを中心とした感情研究の展望

ヴィゴツキーが没して、80年あまりが経った。彼の感情研究は未完のままに終わり、他の研究者たちの手に委ねられた。現在も感情研究は続けてられており、様々な研究に引用されている。感情を分析し、再現することが可能となることで、人工知能に感情を付与することができるかもしれない。また、子どもや人の感情を理解できることになれば、現在言葉や表情、行動等の情報を基に相手の感情を推測している状況を打破できる。現在、人が完全に相手の意思や思考を理解することは不可能である。情報の欠落や、経験を補う言葉が存在しないために、私たちは相手がどのように感じ、考えているかを全て理解することができず、憶測や経験といったことで補うしかない。しかし、感情の本質やメカニズムの解明により、人は本当の意味で感情に沿った意思疎通を図ることが可能になるかもしれない。それは、コミュニケーションのより高次の段階となるのではないかと考える。

現在の感情研究は非常に多岐に渡り、感情とは何かを模索する細かい分析や研究が行われている。先に述べたように、ヴィゴツキーは知的側面と感情的、意識的側面を切り離して研究を行うことは、行動の動機や欲求との関係性に目を向けず、本質のない研究を行うことと同義としている。80年あまり経った今では、感情尺度の検討（寺崎・岸本・古賀、1992）や青年期における友人との活動を通しての感情の変化に焦点を当てた研究（榎本、1999）が行われている。感情とは何かと問う研究や、感情との関連性を測る研究等、感情に関する研究が広く行われることで、多くの事象やデータ、本質がみえてくるのではないか。今後も感情研究が広く行われ、新たな発見や感情のメカニズムの解明がされることを期待する。

より高次のコミュニケーションを目指すために、感情研究は行われる意義を有しているであろう。そのために、感情自体の追及や解明、知性や生物学的観点とどのように感情が関係しているか等の研究を今後とも広く行っていく必要がある。

Ⅲ. ヴィゴツキーによる子どもの想像と人格の発達

1. 表象発生のメカニズム

ヴィゴツキーによれば、それぞれの年齢段階には、発達の全過程を先導し、子どもの全人格を新しい基礎のもとに再編成する基本的で中心的な、仮想的な概念として考えられる新形成物が発達する、という。子どもの人格の個々の側面に関係している部分的な新形成

物や前の年齢段階の新形成物と関連した発達過程は、このような基本的ないしは中心的な新形成物を中心にして配置され、集約されていると考えられる。ヴィゴツキーは、基本的な新形成物と直接結びついた発達過程を発達の中心に据えた。そして、その核となる発達をその年齢段階での「中心的発達路線」と呼び、その他の部分的な過程や変化のことを「副次的発達路線」と呼んでいる。

特定の社会的状況での子どもの生活から各年齢段階に固有な「基本的な新形成物」がどのように必然的に発生し、発達するのかを解明していくことによって、表象が準備される乳児期の特徴を深く捉えることが可能となるであろう。しかし、それ以前に、それぞれの年齢段階の基本的な新形成物を明らかにするために、それぞれの年齢段階に固有な中心的発達路線を把握することが不可欠である。まずは、乳児期に固有な基本的な新形成物から探っていくことにするが、そのことは次に挙げるヴィゴツキーが指摘した二つの事実を確認しておかねばならない。

- (1) より高次の発達路線への不可欠な前提条件として、乳児のエネルギー資源がしだいに増大していくこと。
- (2) 乳児の発達の過程で、世界に対する最初の関係がダイナミックに変化すること。つまり、乳児の能動性が他者を介して実現される方向、すなわち、他の人間を介して周囲の世界の対象に向かうように変化していくこと。

乳児の成長とともに、世話をしてくれる周囲の大人との関係がダイナミックに変化していくことを意味しているのであるが、ここにヴィゴツキーは具体例としてブロンスキーの研究を引用している。ブロンスキーは、「乳児のエネルギー資源の増大」と「周囲の大人と乳児の間のコミュニケーション」との相互作用の見地から、乳児の発達に次のような3つの基本段階を区別している。

①まったく歯が生えていない段階

この段階の子どもはベッドに横たわって、世話を必要とする貧弱な存在である。子どもの側の社会的刺激は、主として、痛みや空腹、不快に対する反応としての泣き声である。子どもと環境との相互作用は何よりも食物に基づいている。この時期には、子どもは何よりも、食事を与えて世話をしてくれる母親と結びついている。

②門歯が生えてくる段階（大体生後6ヶ月ごろ）

この段階の子どもはベッドの中で動くことができる。子どもと環境との相互作用はきわめて複雑になる。一方で、子どもは移動や欲しいものを手に入れるために大人の力を利用しようとし、他方で、子どもは大人の行動を理解し始める。そして、子どもと大人との初歩的な心理的なコミュニケーションが確立される。

③生後2年目

この段階の子どもは、室内であまり動かない状況にいる大人と同等であり、初歩的で単純なものではあるが、大人との間で共同・協力の関係が確立される。

この3つの基本段階において、一方では、乳児と現実との関係の範囲が広がり、大人を介したコミュニケーションの方法の利用も一層広がり多様なものになるが、他方では、乳児の社会的関係の複雑さと多様さの増大と、直接に言葉によるコミュニケーションが不可能であるという基本的矛盾が大きくなると特徴づけている。

この基本的矛盾こそが、乳児期に固有な発達の社会的状況の本質を示しているものであり、乳児の発達のすべての基礎はこの基本的矛盾にあると考えられる。それゆえに、乳児期に固有な基本的な新形成物を確定できるのである。ヴィゴツキーが示した乳児期に固有な基本的な新形成物とは、「本源的われわれ」意識と呼ばれるものである。以下に示すのはヴィゴツキーの説明である。

「乳児の発達全体が進んでいく基本的方向を考慮するならば、その新形成物を確定することができる。すでに見てきたように、この方向は、子どもの活動にとっては外界へのただひとつの道だけが、すなわち、他者を介して繋がっている道だけが開かれているということだ。それゆえ、乳児の体験の中では、具体的状況における乳児と他者との共同活動が真っ先に分化し、際立ち、仕上げられるに違いないと予想することは全く当然のことである。乳児は自分の意識の中でまだ母親と自分とを区別していない、と予想するのは当然のことである。…略…母親からの乳児の心理的解放、母親との本来的な一体性からの自己の分離は、ふつう、乳児期の範囲を越えて、もっぱら幼児期に生ずる。それゆえ、乳児の基本的な新形成物のことを、本来的に生ずる乳児と母親との心理的一体性—この心理的一体性が意識のその後の発達の出発点となる—の名称としてドイツの文献に用いられている用語によって、何よりもうまく言い表すことができる。乳児の意識に最初に生ずるものは、何よりも正確に「本源的われわれ」と名付けることができる。自分自身の人格の意識の発生に先立つこの本来的な心理的一体性の意識は、「われわれ」意識ではあるが、より年長で発生しすでに「われ」を含み込んだダイナミックで複雑な「われわれ」意識ではない。」

2. 乳児の「本源的われわれ」意識と表象の発生

ヴィゴツキーは、「本源的われわれ」意識が乳児期全体の支配的な特徴であることを指摘しており、ワロンやファヤンスなどの研究に基づいた二つの重要な事実をここで参照している。二つの事実はもちろんどちらも乳児の理解には欠かせないものであるが、特に二つ目の事実、乳児の発達における表象発生のメカニズムを理解するためには、とりわけ重要な事実になっている。まずは、ヴィゴツキーが参照した二つの事実から確認していくことにする。

①乳児は自分自身の身体を周囲の世界から分離できず、その独立した存在性を意識できないこと。

ワロンの研究によれば、乳児は、最初は自分の身体でさえ、周囲の世界から分離していないのであるという。乳児は自分の身体を識別するよりも先に、外部の対象を意識するようになる。はじめは、乳児は自分の身体部位を外側にある対象として見つめる。身体を自分のものとして意識するようになるずっと前に、乳児は目と手の動きや両手の動き²を調節することを無意識のうちに学ぶのである。こうして、自分自身の身体をまだ知らない乳児には、当然のことであるが、自分自身についてのいかなる表象も存在し得ることはないと考えられる。

②対象（モノ）に対する乳児の情動的誘因力は、他者と共に状況を体験する可能性に依存すること。

この事実は、この時期の乳児にとっては、その社会的関係（人との関係）と外部の対象（モノ）に対する関係がまだ直後に一体化している、ということを物語っている。乳児にとっては、社会的状況と対象との状況はまだ分離されていない。ファヤンスの研究によれば、対象が目从前から離れれば、乳児にとって、この対象に対する情動的誘因も失われるのである。乳児にとっては、対象との視覚的距離は心理的距離に等しく、乳児は近くにある対象には惹かれるが、遠くにある対象は乳児にとって存在しないかのようである³。

それだけでなく、ファヤンスの研究はさらに次の重要な事実も見出している。それは、たとえ乳児が離れたところにある対象に手を伸ばすのをやめても（言い換えれば、乳児を対象に惹きつける情動的な動機である誘因力の消失が起きたことを表わす）、もし大人（母親）がその対象に近づくならば、乳児の対象への生き生きとした情動と取り組みが再び上昇していくのである。ここで注目すべき事実は、対象への新しい試みは大人に向けられるのではなく、対象それ自体に向けられるということである。対象への大人の接近は、乳児にとって対象への新しい期待を喚起していることになる。

このようにして、大人の介在によって、対象をめぐる場の強度が著しく高まるわけである。外部と対象と乳児との関係は、大人と乳児との社会的関係に容易に転化するのである（母親の介入は自分の介入に置き換わる？）。そして前述したように、この時期の乳児にとっては、大人（母親）との社会的関係は心理的な一体性である「本源的われわれ」意識と呼ぶことのできる乳児と母親との心理的一体性を意味していることになる。そして、まさにこの「本源的われわれ」意識という条件のもとで、初めて、乳児は離れたところにある対象に対する情動的な動機を鼓舞することができるのである。

ここまでくると、この「本源的われわれ」意識を表象の発生を準備する基本原因と見なすことができるであろう。その理由は、「本源的われわれ」意識こそが、乳児に、離れたところにある対象を自分の心の内部に取り込み、それを心理的平面で取り扱うことを可能にするからである。乳児と大人との心理的一体性に基づいて初めて、乳児は自分と対象との間の距離に橋を架け、離れたところにある対象に対して心理的な構えを保持することができるからである。

以上までが、乳児期の特徴に関するヴィゴツキーの論述を分析して得られた、表象発生のメカニズムについての理論である。

3. ピアジェ、ワロンとの比較

(1) ピアジェとの比較

「模倣はまず表象を予示するものであり、換言すれば、感覚－運動期において、模倣は、さまざまな物質的行為のかたちで現われ、まだ思考のかたちで現われこしないが、一種の表象を構成しているのである。子どもは感覚－運動期の終期には、このように一般化された模倣の統制をかなり巧妙に行うことを習得して、延滞模倣⁴すら可能になっていく。そのとき実際、行為による模倣は…略…行為がその状況から切り離され分化された能記となり、したがって部分的にはすでに、思考による表象となる中間的な水準に到達しているのである。」(ピアジェ・イネルデ, 1969)

上記した内容から、ピアジェは表象の起源は延滞模倣にあるとしている。延滞模倣の身振りこそが、「所期」から区別された「能記」⁵の始まりなのである。つまり、延滞模倣ができるということは、与えられるものに触れるだけのことから、主体的に目の前にないものを生み出すことができるまでに発達したことを示している。ここでの能記は置き換えるもの、すなわち表象に対応することになる。こうして、感覚－運動的な模倣行為が内面化される結果として表象が発生すると考えたと言える。

それだけでなく、乳児の模倣行為⁶は他者の行動に由来するという点で、ピアジェ自身も、感覚－運動期における乳児と他者の間での接触や情動的関係の重要性について言及している。しかし、それにもかかわらず、ピアジェは結局のところは、乳児と他者とのコミュニケーションや情動的な関係は感覚－運動的な発達に起因し、それに従属している、と考えている。

以上のように、ピアジェは、延滞模倣を発達させる最も本質的な要因は、乳児と他者との社会的関係ではなく、感覚－運動的な模倣行為それ自体だと考えている。つまり、ピアジェは、外界にはたらかける感覚－運動的な実践的行為の延長線上に、表象の発生を見ているのである。

それに対して、ヴィゴツキーは、感覚－運動的な適応の延長線上に表象の発生を見るのではない。すでに検討してきたように、ヴィゴツキーによると、表象の発生を準備する乳児の「本源的われわれ」意識は、乳児と大人との切っても切れない社会的関係にこそある。表象の起源として、ピアジェは感覚－運動的行為そのものを考えているが、ヴィゴツキーは社会的関係を考えているわけである。この点が、両者の根本的な違いであると思われる。

(2) ワロンとの比較

表象を発生させる基本要因について、ワロンは、特に人間それ自身に内部で作用する自己塑型的（自己－形成的）な行為に注目している。それはまさに、乳児と大人との社会的関係のための不可欠な前提条件をなす体勢に関する活動のことである。ワロンによれば、表象の発生は、乳児が他者の面前で一定の体勢を保持することによって準備される。つまり、他者との非言語的なコミュニケーションの中で、自分の動きを抑制しつつ一定の体勢

を保持している乳児の筋緊張した身体によって、表象は準備されるということになる。そして、この点について、ワロンは次のように述べている。

「…思考の起源が、人間を最も固く自己自身の内に閉じ込めるはたらき、つまり、姿勢を保持するはたらきにある、ということはさして不思議には思われない。実際、主観的直観と意識の最初の努力は姿勢から発生してきたのである。このことは、姿勢活動とその本質的に形成的な特性がなければ、不可能だったのである。」(Wallon, 1949)

ワロンによると、感覚や知覚とは区別された、むしろ感覚や知覚と対立する心理的なものの一般が表象であるから、先の引用の思考の起源は表象の起源でもあり、主観的直観と最初の努力にほかならない。

このような点では、ヴィゴツキーと同様に、乳児と大人との社会的関係を表象発生の前提条件と考えていると言える。しかし、ヴィゴツキーは、乳児の「本源的われわれ」意識に基づいて誘発され形成される、離れたところにある対象（モノ）に対する乳児の心理的な構えに注目する。つまり、乳児と大人との社会的関係を表象発生の不可欠な前提条件と考えつつも、それにもかかわらず、ヴィゴツキーは、社会的文脈の中からあらためて乳児と対象との関係を抜き出すのである。この点で、ワロンとは異なる。

この点に対して、ワロンは、大人に向けられた乳児の構えとして形成される体勢に関する活動に注目する。つまり、ワロンは表象の発生を理解するために、一貫して、対人的文脈において他者に向けられた乳児の体勢に注目するのである。そこから、さらに、体勢に関する活動の内部で生ずる緊張性の内受容感覚や自己受容感覚の分析を進めていく。ワロンによれば、表象発生の基本原因は、他者に向けて準備しつつ、しかし、すぐには運動となって発現しない筋緊張に満ちた体勢に関する活動に求められる。このように、「緊張する身体」が表象を準備すると考えたのである。

(3) ヴィゴツキーの位置

ヴィゴツキーは、ピアジェとワロンの中に位置しているが、相対的にはワロンに近いように思われる。ピアジェとは違って、表象発生の不可欠な要因として社会的文脈を強調する。しかし、ワロンと比較すると、大人との社会的関係の前提となる身体や情動と表象発生との関連について、ワロンのような深い探求は見られていない。他者に向けられた乳児の構え（体勢）の基礎にある緊張性の内受容的、自己受容的な感覚に対して、とりたてて注目しているようにも思われない。それゆえ、もし、表象の発生に関して、乳児と大人との社会的関係という観点から説明していこうと考えるのであれば、ヴィゴツキーの考えだけでは不十分に思われる。

IV. ヴィゴツキーの概念発達の実験的研究

1. 当時の概念研究への批判

ヴィゴツキーは、当時の概念研究に対して批判的な態度をとっていた。その批判的態度から、彼の考える概念研究および概念像を明確化する。

ヴィゴツキー以前の概念研究の方法は二つの基本的グループに分けられる。第一グループは、いわゆる定義法である。これは、子どもがすでにもっている既成の概念を言葉という形にし、その内容を定義として研究する方法と説明できる。この方法は、広く普及した方法であったが、どうしても依拠することのできない二つの本質的欠陥を抱えていたとヴィゴツキーは述べている。

一つは、この方法はすでに完了した概念形成過程の結果、既成の産物を問題にするものであって、この過程そのもの、発達、その経過、そのはじめと終わりを捉えるものではないという点である。つまり、この方法は産物の形成をもたらす過程の研究というよりも、むしろ産物そのものの研究であったということである。

そして、もう一つは、この方法は、概念が感性的材料と結びついたものであることを忘れ、言葉だけを操作しているという点である。感性的材料と言葉は、概念形成過程において必要不可欠なものであり、またその過程においてこれらは切り離すことのできないものであるということをヴィゴツキーは示しているのである。

これらのことから、概念を考える上でヴィゴツキーが最も重要としていたことは「概念の形成過程」そして、「概念の現実との関係」であるということが読み取れるであろう。

第二グループは、抽象化の研究と呼ばれる方法である。これは、概念形成の基礎にある心理学的機能や過程を研究対象としたものである。ヴィゴツキーはこの方法の欠陥を次のように述べている。

「この方法は、抽象化することによって対象を構成する一部分の要素的過程にしか焦点を当てていない。したがって、この方法の欠陥は、言葉の役割を無視し、概念形成の過程全体の中心的な特徴である言葉との関係を外に置いている点である。」（ヴィゴツキー著・柴田義松訳, 2001）

このように、ヴィゴツキーは概念研究の伝統的方法を現実、そして言葉との分裂と特徴づけ、批判している。ここから、ヴィゴツキーの考えていた概念像が見えてくると考える。

2. 概念発達の実験的研究－アッハとリマの研究－

その後、これらの欠陥をうまく取り入れた実験方法が登場し、この新たな実験方法の登場は、概念研究の新しい可能性を生み出した。この新たな実験方法は、概念形成の土台となる「現実」、そして、概念の発生を助ける「言葉」をうちに含んだ、概念形成の過程をそのままに表現しようと試みる方法である。この方法の導入によって、研究者たちの前に

はまったく新しい見地が開けたのである。

その研究者の中の一人にアッハ⁷という人物がいる。彼の研究は、概念を形成する一連の諸特徴の総合の過程、概念発達の過程を研究対象としたものであった。この研究では、実験に、被験者にとって初めて耳にする無意味で、今までの経験とは結びつきのない人為的な言葉を用いること、そしてその「ことば」によって標示されるわれわれの概念の世界では出会うことのない実験のために特別に作り出された人為的概念を導入するという原理が用いられた。これにより、この実験では無意味な単語の意味づけの過程、単語が意味を獲得し、概念が作りだされる過程に焦点を当てることができたと言える。つまり、彼の実験方法は、概念形成の過程をその純粋な形態において研究することを可能にしたのであった。

アッハはこの研究を通して、概念が、少年（青年）の知的発達において概念的思考を経てあらわれるという新たな発見をしたのである。これを受け継ぎ、少年（青年）における概念形成の過程について細密に研究を行ったのがリマである。彼は自身の研究を通し、次のように語っている。

「われわれは、12歳の終わりになってはじめて一般的な客観的表象を自主的に形成する能力の急激な向上が現れるといことを十分に立証することができる。…略…概念的思考というのは、12歳までの子どもの心理的能力を超えた要求を子どもに提出するものである。」（ヴィゴツキー著・柴田義松訳, 2001）

つまり、彼は研究の結果、概念形成は「少年（青年）への」過渡期、つまり思春期の到来を待ってはじめて発生し、この時期に至るまでの子どもには不可能であるという今までにない新たな結論を出したのであった。

また、アッハとリマの研究より導かれる基本的結論は、概念形成の過程についての連合的観点に対する反対である。つまり、彼らの研究は、概念形成には、様々な言語的記号と様々な対象との連合が必要であるということは確実であるが、それだけでは概念形成にはまったく不十分であるということを示し、また新たな概念形成の観念を世に生み出したのであった。

また、これと同時にアッハは、概念形成は生産的性格をもっているということを示した。概念形成は、常に再生的なものではなく生産的な性格をおび、概念は何かの問題の解決に向けられた複雑な操作の過程で起こる。つまり、アッハは、概念形成には解決されるべき「課題」の存在が必要であるということを示したのである。

言葉の暗記やそれと物との結合、それ自体は概念の形成をもたらさず、この過程が発生するには、個人の前に、概念を形成することなしには解くことのできないような「課題」が発生しなければならないということをここでは意味している。

ところで、前述したように、アッハは、概念は少年（青年）の知的発達において概念的

思考を経てあらわれるという発見をし、概念形成はある程度の知的発達が図られなければならないものとした。しかし、この「課題」については乳児にも幼児にもあるものである。そこでアッハはどのようにこれらのことを考えたかという、乳児や幼児は、自分の前に立てられた課題を自覚することは十分にできても、新しい概念を形成することはできないとしたのである。つまり、彼らは大人とはまったく違った形で問題解決の過程を展開しているとアッハは示したのである。

この就学前の子どもの概念形成の研究を行った者の一人にウズナージェ⁸という人物がいる。彼もまた、就学前の子どもが概念を操作するとき、機能的な点では大人とまったく同じようにして課題にぶつかるが、この課題を彼らはまったく違った形で解いていくということを示している。そして、ウズナージェはその過程において子どもも大人と同じように言葉を利用しているということを発見したのである。

3. 概念発達の実験的研究－ウズナージェの研究－

ウズナージェは、概念を形成する上での言葉による伝達、人々の相互理解に注目して研究を行った人物である。これに関して彼は次のように述べている。

「言葉は、人々の相互理解の手段となる。概念の形成においては、まさにこのことが決定的な役割を演ずる。相互理解を確立する必要があるとき、一定の音複合は一定の意味を獲得する。このようにして、それは言葉あるいは概念となる。このような相互理解なしには、どんな音複合も何かの意味の担い手となることはできず、どんな概念も発生することはないであろう。」(ヴィゴツキー著・柴田義松訳, 2001)

周知のように、子どもと大人の世界との接触は、きわめて早くから確立される。子どもは、生まれたときから言葉が交わされる環境の中で成長し、自分自身も2歳頃から言葉のメカニズムを利用し始める。このような事実を基に彼は次のように述べている。

「子どもは無意味な音複合ではなく、真の言葉を利用しており、発達していくにしたがって、それらがだんだんより分化した意味を結びつけていく。」(ヴィゴツキー著・柴田義松訳, 2001)

つまり、ウズナージェは、人々と相互理解を図ろうとするときに概念が形成されるということ、そしてそのときに言葉が使用されるということを示しているということができるであろう。また、子どもも大人と同じ真の言葉、つまり、一定の意味をもった言葉を用いていることから、子どもの概念形成においても人々との相互理解が大きな可能性をもっているものとして考えることができるであろう。

4. ヴィゴツキーの考える概念発達の実験的研究における課題

これまで、アッハやウズナージェらによって行われてきた概念研究について述べてきた。本節では、それらの研究を通してヴィゴツキーが考えた概念研究の課題、そして彼が自身の研究で明らかにしようとした課題について考える。

アッハの研究より、概念形成には課題の存在が必要であるということが明らかとなった。また、これに対して、アッハとウズナージェはこの課題は比較的発達段階の早い子どもにも理解されること、そしてその課題の解決の過程において機能する思考様式そのものが、子どもと大人では、その構成、構造、活動方法に深い相違があることも同時に明らかにしている。しかし、ヴィゴツキーはこの課題そのものが、課題解決の過程全体を決定し調整するものではないことを述べ、概念を形成するには、アッハが注意することなく残していった新しい要因の存在がまだあることを指摘した。

つまり、ヴィゴツキーは、目的は過程の説明とはならないとし、その目的を達成しようとするときに使用する道具や適用する手段によって、概念形成を説明することの必要性を説いたのである。

そこで、ヴィゴツキーが概念形成において注目した道具、手段が言葉である。言葉の機能的使用とその発達、各年齢において質的に異なる多様な、しかし発生的には相互に結びついた適用の形式の研究のみが、概念形成研究の鍵となり得ると考えたのであった。

以上の課題を解決するため、ヴィゴツキーは実験研究を行った。用いられた実験方法は、二重刺激の機能的⁹方法と呼ばれるものである。この方法の本質は、試験者の行動に対して異なる役割を果たす二系列の刺激によって、高次の精神機能の発達と活動を研究するということにあるとまとめられる。

5. ヴィゴツキーの行った概念発達の実験的研究

ヴィゴツキーの研究は、概念形成の過程における言葉の役割とその機能的使用の性格を解明することを目的に行われたものである。そして、そのために用いられた実験方法が、二重刺激の機能的⁹方法である。これは、「刺激－心理学的道具－反応」の3項図式を前提とした心理学の実験であり、それぞれの刺激をどのように被験者が使用するかを測る実験方法である。ヴィゴツキーは、課題の定立・目的の発生は概念形成の過程が発生するために必要なものであることを前提に、手段は、被験者が問題を解決しようと試みたときに導入されるという考えに立ち、問題解決の手段、すなわち記号－刺激あるいは言葉を変数とし、課題を不変数とし研究を行った。これらを用いて、被験者が記号を自分の知的操作を方向付ける手段としてどのように適用するか、そして、それによって概念形成の過程全体がどのように進行するか、発達するかを研究したのである。

この研究において、最も本質的な、原則的な要素となったものは、概念はピラミッドが逆さになるということである。概念形成は、機械的な集計によって具体から抽象への移行を通じて行われるものではないとしたのである。

また、概念を静的な孤立した形ではなく、思考および問題解決の生きた過程において捉えたことも、この研究において重要な点である。概念の働き、思考過程における概念の様々な機能的適用をうちに含んだ一連の段階に研究がゆきわたるようにしたのである。つまり、概念の形成過程、新しい対象へのその概念の転移過程、自由な連合過程における概念の利用、判断の形成における概念の適用などといった、これらの様々な状態を通して概念を捉えようとしたのである。

彼の実験の過程は、以下のように進められた。

まず、被験者の前に色、形、高さ、大きさの異なる22個の積み木を用意する。色は5種類、形は6種類、高さについては、高い物と平たい物の2種類、また、大きさについても大小の2種類とした。そして、これらの積み木の裏側には、それぞれ、無意味な単語、例えば「ラグ」、「ビク」、「ムル」、「セブ」のような、被験者にとって今まで聞いたことのない、意味の分からない4つの単語のうちのいずれかを書いた。しかし、これらの単語は、実はある意味、つまり、ある概念をもっているものであり、それを被験者がどのように発見していくかがこの実験の重要なポイントとなる。

例えば、「ラグ」は、色、形にかかわらず、すべての高い大きな積み木に書かれており、「ビグ」は平たい大きな積み木に、「ムル」は高い小さな積み木に、「セブ」は平たい小さい積み木にそれぞれ書かれている。

これらの積み木は雑多な順で置かれ、被験者はその中から一つの積み木を選び、裏返してそこに書かれている単語を読む。この積み木を「見本」とし、以降被験者はこの「見本」と同じ種類、つまり同じ単語の書かれた積み木を探し出していくが求められる。その際、被験者は、自身で積み木は裏返すことはできないとし、彼らがこれだと指示したものを実験者が裏返していくようにした。こうして裏返されていく積み木が増えていくにつれて、被験者は段々とその単語の意味を理解していく。つまり、段々と新しい概念が、被験者に形成されていくということであり、その過程、その段階を実験者は、被験者の反応の仕方や解答の仕方から追跡していくということである。

この実験は、総計300人以上の児童、少年（青年）、大人、そして病的な知能及び言語障害者^{原文ママ}に対して行われた。このように、様々な年齢段階における概念形成の発生過程を追跡することができ、またそれらを比較検討することができたことにより、ヴィゴツキーは、この概念形成の発達過程を支配する基本的法則性を明らかにすることができた。

そして、彼は、自身の実験より以下の結果を導き出した。

まず一つは、概念形成の基礎を形成する知的機能は、過渡的年齢（思春期）において初めて形成され、そして発達するということである。つまり、子どもが少年（青年）へと変わるとき、初めて概念的思考の領域へと足を踏み入れるということである。

そして、もう一つは、概念形成は、様々な要素が、独特に組み合わさって行われる複雑な能動的活動であるということである。また、この過程において中心となるものについてもヴィゴツキーは示している。それは、自分の行う心理学的操作を自分自身の支配下に置

いて、自分自身の心理過程の流れを制御し、その活動を自分の前に立てられた問題の解決に方向付けるときの助けとなる記号や言葉の機能的な使用であるという。前述したように、概念形成には、多くの要素が必要であり、それらが複雑に絡み合っただけで概念は形成されていない。つまり、それらの要素一つひとつを絡み合わせていかなければ概念は形成されないということである。そして、このときに、記号あるいは言葉を使用し、自身を課題の解決に方向づけ、その中でそれぞれの要素を絡み合わせ、新しい結合・新しい総合を行っていくとヴィゴツキーは示したのである。

V. おわりに

ヴィゴツキーの研究態度は、テーゼ・アンチテーゼ・統合という図式で示される。自身の主題を示し、従来の見解を論破し、新たな主張をすることによって多くの結果と結論が示される。人間の発達を考えるとき、「感情」「表象」「概念」は人間の本質そのものに近い。その発達はどのように探ることができるのであろうか。外に表れる行動や言語をいくら観察してもそれは解明できない。逆なのである。行動・思考・言語を成り立たせているのは、人間における感情、表象、概念の発達なのである。

このことは、知的障害のある子どもたちの教育において、より重要である。行動、思考、言語そのものを豊かにしようとするならば、それらを直接、増加しようとするよりも、感情、表象、概念の発達を丁寧に取り組むことが必要なのである。

(執筆分担：Ⅰ－ 広瀬，Ⅱ－ 芦沢，Ⅲ－ 滝口，Ⅳ－ 加藤，Ⅴ－ 広瀬)

注1) 主知主義：すべての存在は原理的に、観念や心理などの合理的要素に還元しようとする哲学上の立場である。

注2) 手や指の動きについて（微細運動）：微細運動は手指の運動でもものの操作に関係している。単なる運動発達ではなく、認知の発達や好奇心などとも関係している。その代表的なものがリーチング（手伸ばし行動）と呼ばれ、これは、自分の手を伸ばして身体のそばにあるものをつかむ行動で、生後5ヶ月頃からみられ、自分の意思で周囲のものと関わることができるようになったことを示している。微細運動の発達として具体的には、生後2ヶ月…ハンドサッキング（手を口に入れて吸う動作）・生後3ヶ月…ハンドリガード（手の注視）・生後5ヶ月…リーチング、両手掴み、もちかえ・生後10ヶ月…小さいものをつかめるようになる、手を離してものを落とすことができるようになる・生後12ヶ月頃…スプーンなどの生活道具を使うことができるようになる、というようになっている。

注3) 対象の永続性（ピアジェの認知発達理論）：赤ちゃん（乳児）の「モノに対する認識」は、おもちゃで遊ぶようになる8ヶ月頃に実験をすると、「目の前にない隠され

たモノ（おもちゃ）の存在」を認識できないので、カバー（布）を掛けて物を隠すと探さないことが分かる。感覚―運動期にある8ヶ月以下の乳児は、基本的には「目の前にあるモノの存在」だけしか認識することができず、自分の視覚や行動とは無関係に「モノそのもの」が永続的に存在するという客観的事実を理解することができない。しかし、8ヶ月頃の乳児の目の前でモノにカバーを掛けて隠せば、そのカバーを外してモノを見つけることができ、「モノが隠された状態のプロセス（隠されている場面）」を見ていれば、目の前にモノがなくても探すことができる。

注4) 延滞模倣：動作などの模倣で、即時模倣ないし直接模倣がモデル（模倣の相手、対象）の行動直後に見られる模倣を指すのとは異なり、相当な時間経過後に模倣行動がみられる場合を意味し、遅延模倣とも呼ばれる。

注5) 能記と所記：意味するもの（能記）と意味されるもの（所記）の関係で成り立つ象徴機能である。

注6) 乳児の模倣行為：1歳半から2歳頃にかけて、子どもには象徴遊び（動作による模倣遊び、延滞模倣（経験したことの動作による再現）、描画、心像そして言語などによる象徴活動が生じ、目前にない事物や出来事について子どもが記憶し、思考する範囲が広がっていく。しかし、その思考はピアジェが指摘したように、知覚の影響を受けており、内面化され、可逆性をもった操作にまで発達していないので、知的課題を十分に論理的に解決することはできない。なお、この時期は前概念的思考段階と直観的思考段階に区分される。

注7) アッハ（Ach, Narziss Kaspar）：ドイツの心理学者であり、ヴェルツブルク学派の指導者の一人である。思考、意志の実験的研究を行い、無心像思考、決定傾向の考えを提唱した。

注8) ウズナージェ（Dmitry Nikolaevich Uznadze）：旧・ソビエト連邦の心理学者であり、児童心理学を専門とする。子どもの思考の過程を追究した人物である。

注9) 二重刺激の機能的な方法：「刺激―反応」の2項図式を前提とする心理学の実験では、基本的刺激としての「対象刺激」を与え、それに対する被験者の「反応」を測定し量化処理する。これとは対照的に、「刺激―心理学的道具―反応」の3項図式を前提としたのが二重刺激の機能的な方法である。この方法では、従来の対象刺激だけでなく、心理学的道具としての第2の刺激である「手段刺激」を導入する。「手段刺激」は被験者が課題を解決する助けとなるものであるが、それはあくまで助けになり得るということである、場合によっては助けにならないばかりか妨害になることさえもある。つまり、それぞれの刺激をどのように使うかは被験者次第で変わってくる。したがって、二重刺激の機能的な方法における分析対象は「反応」ではなく、「刺激―心理学的道具―反応」のシステムの形態と機能であると言える。

文献

- 1) 榎本淳子（1999）青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, 47（2）, 180-190.
- 2) 藤野友紀（2004）記銘における外的媒介物の利用とリテラシー発達. 北海道大学大学院教育学研究科紀要,（92）, 11-31.
- 3) 中村和夫（2010）ヴィゴツキーに学ぶ 子どもの想像と人格の発達. 福村出版.
- 4) 中村和夫（2014）ヴィゴツキー理論の真髄－なぜ文化－歴史的理論なのか－. 福村出版.
- 5) 茂呂雄二（1999）具体性のヴィゴツキー. 金子書房.
- 6) 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人（1992）多面的感情状態尺度の作成. 心理学研究, 62（6）, 350-356.
- 7) ヴィゴツキー著・柴田義松訳（2001）思考と言語. 新読書社.
- 8) ヴィゴツキー著・菅田洋一・広瀬信雄訳（2002）子どもの心はつくられる－ヴィゴツキーの心理学講座－. 新読書社.